

5-2 濱名徳順師による星埜山東栄寺の仏像調査報告について

蕨 由美

保品の古刹の星埜山東栄寺には、「薬師如来」像といわれる仏像が秘仏として伝えられ、眼病など様々な病を癒すと信仰されてきた。

この像は、昭和 62 年（1987）八千代市教育委員会調査報告書『八千代市の仏像』では、「江戸時代」の「薬師如来立像」として、法量と各部位の概要、そして「全体に損傷が甚だしい」と記されているが、その写真では、薬壺を持たない来迎印の像であること、また平成 5 年（1993）、八千代市歴史資料館企画展「清涼寺式釈迦像と正覚院」において、「頭部が清涼寺式の類似像」として本像が展示され、その際に実見した「江戸時代」を遡る印象から、この伝「薬師如来」像は、私にとって「謎の秘仏」であった。

また平成 14 年（2002）、本来の本堂であった薬師堂の改修が行われて、宝永 4 年（1707）に大改修が施されていたことが判明。その落慶法要で公開された内陣の、江戸期と思われる新しい薬師如来像の納められた厨子、その両側の日光・月光菩薩の脇侍、さらに眷属の十二神将が立ち並ぶ力強い姿は圧巻で、文化財としても貴重な仏像群と思われた。

今年度の当会の「保品」研究において、これら東栄寺仏像群の専門的な鑑定の必要性を痛感し、佐倉市宝金剛寺住職で仏像研究者の京極勇剛師に相談して、千葉県のみ仏像調査では随一の業績がある濱名徳順師に調査をお願いすることが実現した。

調査は、当会の村田一男顧問と筆者の二人で濱名師に依頼、東栄寺ご住職のご厚意で、令和元年 5 月 7 日、濱名徳順師、並びに京極勇剛師ほかスタッフ 3 名により、本堂（不動堂）左陣の位牌堂に安置されている伝「薬師如来」像、および薬師堂の脇侍と十二神将について実施、当会会員 4 名が調査を見学させていただいた。

この調査によって、位牌堂の伝「薬師如来」像の現状は「阿弥陀如来像」であるが、元は「波状髪」の像容をもつ「靈験」性の強い薬師如来であったと推定され、年代は南北朝から室町時代の中世に遡ることから、保品の中世史を物語る重要な文化財であることが判明した。

調査の後、濱名師から詳細な調査報告と画像データを拝受、さらに本誌に掲載するお許しをいただいたので、その報告の全文と表、画像の一部をご紹介しますと共に、濱名徳順師にあつく御礼申し上げます。ありがとうございました。

濱名徳順師のプロフィール

天台宗宝聚寺住職。仏教美術・仏像彫刻の専門家で、『千葉県の歴史 通史編 中世』の美術、『仏像半島一房総の美しき仏たち一』（千葉市美術館 2013）の展示図録に「房総の薬師如来像とその信仰」を執筆。山武市・富津市の文化財審議委員。

保品東栄寺の仏像調査の報告

濱名 徳順

1. 阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）について

像名：阿弥陀如来立像（伝薬師如来立像）1体		
所在地：八千代市保品 917 東栄寺	調査日： 令和元年5月7日	
年代：南北朝～室町時代	作者：不明	
材質：木造・彩色・彫眼	伝来：	
銘文等：無し	構造：一木造り	
像高：67.7 cm	髪際高：61.9 cm	
耳張：9.2 cm	面長：8.9 cm	
面幅：7.3 cm	面奥：9.3 cm	
胸奥：11.1 cm	腹奥：13.0 cm	
肘張：18.0 cm	裾張：13.9 cm	

(1) 形状

頭部には肉髻相を現わす。頭髮は螺髪ではなく清涼寺釈迦如来風の同心円状の毛筋彫りとするが、肉髻部では両側面や頂上にも同心円状の髪筋を現わす。地髪部では正面と両側面に同心円状の髪筋を現わすほか、側面から背後に掛けて生え際に幾つもの渦巻旋毛を現わす。旋毛は左側では左旋であり、一方右側では右旋とする。後頭部中央は毛筋彫りを省略する。肉髻珠、白毫相を現わす。面部寂静相。耳朵環状。首の三道相は不明。

大衣を偏袒右肩に着用、さらに覆肩衣を着用して右肩・腕を覆う。覆肩衣は上端を衿状に一段折り返す。大衣は上端を折返し、末端を左肩・腕に掛ける。衿状折返し部左側で二つ右旋文を作る。左手は肘を曲げ前出して鳩尾高で施無畏印とし、第一・二指を相捻じる。左手はわずかに肘を曲げて斜め下に垂下して与願印とし、第一・二指を相捻じる（阿弥陀来迎印）。下半身には腰裳を着用、腰裳下端は蓮台上まで延び、両側面は撥状に広がる。両足を揃えて蓮華座上に立つ。

台座は蓮華座、光背は二重円相舟形拳身光とする。頭光内には八葉蓮華を現わす。身光部は無文で中央部は割り貫き式とし、光背外縁部には渦雲文を刻む。

(2) 構造・状態

頭体幹部は櫃の豎一材（木芯は像の左側に外す）より彫成する。内削りは無いものと思われる。肉髻珠（材不明）嵌入、白毫珠水晶嵌入。彫眼。両体側部（肩先）別材製、その際右側は前後二材よりなるものと思われる。さらに両手首先を別材製挿込式とする。像底の雇柄にて台座と接合する。

台座・光背後補。両足先別材製後補。像下端に約二cm程の後補の足し木があり、足し木は前後二材よりなる。像底の雇柄後補。表面彩色後補（当初不明）。鼻後補。肉髻珠・白毫珠後補。左耳朶後補カ。両手首先後補。左手第三・四指先欠失。左袖末端に小欠失。裳裾右下端後補カ。

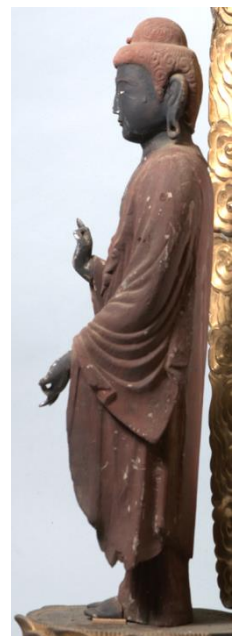
写真：阿弥陀如来立像



阿弥陀如来 右斜



阿弥陀如来 上半身左斜



阿弥陀如来 左側面



阿弥陀如来 頭頂



阿弥陀如来 頭部左側面

(3) 備考と考察

髮際で大略二尺の如来立像、現状の手印は阿弥陀如来の来迎印である。当初は薬師如来像であったとも言われるが、その典拠は詳らかではない。全体に表面の朽損があり、アウトラインは当初のままと思われるが、面貌等の細部については不明と言わざるを得ない。像容では耳がことさらに大きく、やや幅広で平板な顔立ち等、同心円状の髪型も含め清凉寺式釈迦の像容を意識した可能性が高い。

一方、着衣は通常の如来立像のそれであり、清凉寺式釈迦的な要素は全くない。衣文については比較的深めに刻まれ、部分的に大衣衿の渦状文や左袖末端の翻り等宋風を加味している。肉身の表現は胸に充分な厚みを持たせ、肩や背の丸み等の肉付けも適切である。後頭部から背筋への側面観も自然で優れている。制作年代については、しっかりした肉身表現など作期が遡ることを示唆する。14世紀後半から15世紀前半頃と見るのが穏当であろう。榧材の使用から当地での制作と推定される。作者は相応の水準に達した仏師と言うことが出来る。

ほど近い市内村上所在正覚院の清凉寺式釈迦如来像(鎌倉後期・県文化財)について、当保品の地に頭部が流れ着いたとの伝承があり、同様に同心円状の毛筋を示す当像との関連が注目されることである。前述したように当像の頭部は清凉寺式釈迦の像容を模倣した可能性が高いが、生え際に多数の旋毛を現わす当像の頭髪表現は明らかに清凉寺式釈迦如来像のそれとは別物である。とりわけ、真言律宗系の造像は頭髪の「髪束一条一条に括りを入れ、ねじれの表現を意図」①、通肩の着衣や小波状の衣文線を採用するなど、「忠実に原像を写そうとつとめている」②傾向がある。当像は頭髪表現も異なり、着衣法や衣文も別物であって真言律宗による造像と考えることは出来ない。

次に、同心円状の毛筋彫りを持つ仏像として、薬師如来立像が一定数所在し、とりわけ鎌倉後期以降造像数が増えることが知られている。近年の研究でこれらは文献に見える「一日造立仏」に関連したものである場合が多く、その際天台僧の関りが窺われ、比叡山延暦寺の根本薬師の像容に影響を受けた可能性が指摘されている。当像の場合、当初は薬師如来像であったとの伝承がある。また薬師堂には十二神将像も遺存していて、現状の中尊は近代の作と推定されることから、これらが当初当像の眷属であった可能性も否定できないのである。さらに中世の薬師信仰がしばしば天体信仰と習合するものならば当寺の名称「星埜山東栄寺」は薬師如来を本尊とする寺院にふさわしいものと言える。

しかしながら、当像が当初薬師如来像であったと仮定しても、こうした同心円状頭髪の薬師如来立像とは別種のものと言わざるを得ないだろう。西木政統氏らにより指摘される「波状髪」薬師如来立像(以下波状髪薬師)は肘を曲げて両手を胸前に出すものがほとんどであるのに対して、当像は右手を胸高に挙げ、左手を垂下する通常の施無畏・与願印であること、さらに波状髪薬師は螺髪相より迅速に彫成が可能なものとして「波

状髪」とされているのに対して、当像は生え際に多数の旋毛を彫成する手の掛かる像容であることが指摘できる。さらには、波状髪薬師は同様に迅速な造像を可能とするため衣文表現を簡略化しているのに対して、当像の衣褶表現は渦状文を現すなど比較的丁寧であることも挙げられる。波状髪薬師はむしろほど近い佐倉市畔田西光寺薬師堂に安置される薬師如来立像がその範疇に属するものと言える。

それでは、真言律宗系清凉寺式釈迦如来像の摸刻像でもなく、天台系の波状髪薬師でも無いとしたら、当像はいかなる意図をもって造像されたのだろうか…前述したように、当像の面貌や頭髪が清凉寺式釈迦に倣ったものであることが間違いないとするならば、そして当初薬師如来像であったと仮定するならば、ほど近い村上の正覚院の清凉寺式釈迦如来像や畔田正光寺薬師如来像が特別な靈驗仏であるとの評判を聞き、その像容を頭髪表現等に採り入れて造像されたとするのが穏当なところでは無いか。他所でも論じたことがあるが、印旛沼周辺は古代・中世においてその水運が活用され早くから開発が進んだ地域であったが、その臨水性ゆえに水害に見舞われることも多かったとされる。そうした中で天空を制御する効験がうたわれる薬師如来の信仰が一带に古代より展開したことは周知の通りである。切実な要望の中で、通常の薬師如来像よりもさらに強い靈験が期待されて産み出された像容と自分は考える。

①②西木政統「鎌倉時代の特異な薬師立像と一日造立仏との関わりについて」『哲学 No.132』三田哲學會

2. 薬師堂の十二神将像・日光菩薩・月光菩薩などについて

十二神将は、像高はいずれも 50 cm 弱、構造の詳細は不明だが寄木造りで、挿首と思われる。体軀は数材を寄せて彫成、その他両腕以下や体側部などを適宜矧ぎ寄せている。丁寧な内削りが施されているものと思われ、像は意外なほど軽い。材は檜と思われる。現状は鼠色の彩色仕上げとするが当初の仕上げは不明である。いずれにせよ手慣れた造像であることは疑いない。作者は中央の仏師であろう。

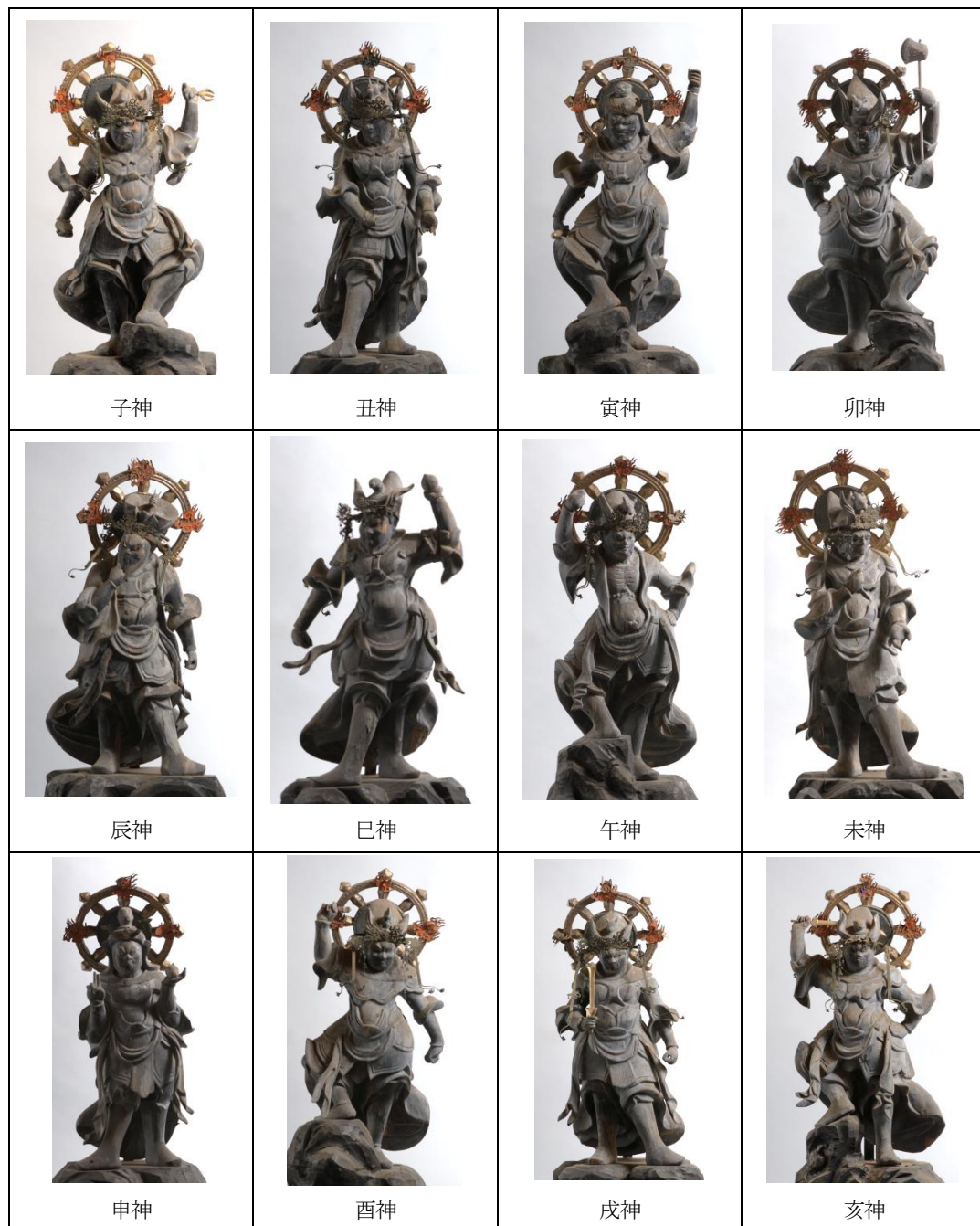
正面観にはなかなか颯爽とした趣があるが、面部の飄逸味ある表情も優れているが、側面観で腰回りが極太となることや足先の開き具合等不自然さは打ち消し難く、鎌倉彫刻のような写実性は見いだせない。

さらに、江戸期の仏師が造像の参考にしたとされる『仏像圖彙』（元禄三年・1690 刊行）所載の図と二体（巳神・午神）を除いて、持物が一致していて、これを参照した可能性が高いことから、作期は江戸期に降るものと思われる。その際、二体（辰神・亥神）の台座に「享」の墨書があることから享保年間の造像とするもの一案であろう。

現本尊より当像の方が規模が大きく、作風からも現本尊が後補であることが想定できる。とすれば現在本堂内の位牌壇に安置される木造阿弥陀如来立像が当初薬師如来像であったとする伝承があり、あるいは当像はこの眷属として造像されたものかと思われる。

日光・月光菩薩も 50 cmほどの像高を持っていて髪際で一尺五寸ほど、これもむしろ髪際高二尺の阿弥陀如来立像の脇侍に相応しいものと言える。あるいは、十二神将と日光・月光菩薩は一具の造像であった可能性もあろう。

写真：十二神将像



仏像調査票

調査実施：令和元年 5 月 7 日			寺院所在地：八千代市保品 917 東栄寺			
調査員：濱名 久保 京極 高橋 原田			構造：全て寄木造り		年代：全て江戸時代	員数(体)：各 1
No	像名	像高	材質	像容	銘	考察
1	十二神将子神	47.8 cm	木造古色玉眼	炎髪、頭頂に標示の鼠頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口、耳朶不貫。皮鎧を着用。左手は振り上げて三鈷杵を執る。右手は斜め下に伸ばし手を握る。左足を踏み上げて磐座上に立つ。光背は頭光のみで輪宝光背（以下 巳神以外同じ）。	台座天板裏：子神	『仏像圖彙』（以下 仏）の子神は右手で三鈷杵を持つ。
2	丑神	48.1 cm	木造古色玉眼	炎髪、頭頂に標示の牛頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉根を顰め割目する憤怒相、閉口、耳朶不貫。皮鎧を着用、右足を斜め前方に踏み出して顔や身体も斜め右側に向く。左右の手は前方に垂下して持物（刀カ）を執る勢い。右手欠失。	左足柄：巳台座天板裏：午神	仏の丑神は両手で太刀を持つ。
3	寅神	47.3 cm	木造古色玉眼	頭には甲を着用、頂上に標示の虎頭を現わす。金銅製の甲前飾を付ける。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口。皮鎧を着用。左手は振り上げて持物を執る。右手は斜め下に下げて宝棒を執る。右足を踏み上げて磐座上に立つ。	左足柄：寅三台座天板裏：とら神	仏の寅神は右手宝珠、左手宝棒を執る。
4	卯神	49.8 cm	木造古色玉眼	炎髪、頭頂に標示の兎頭を戴く。金銅製の宝冠台と冠帯を着用。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口、耳朶不貫。皮鎧を着用、左手を振り上げて斧を執り、右手は腰に置く。左足を踏み上げて磐座上に立つ。	台座天板裏：卯神	仏では左手で斧を執る。
5	辰神	48.9 cm	木造古色玉眼	冠帽を被る。頂上に標示の龍頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口、耳朶不貫。顎に髭を蓄える。革鎧を着用。左手は垂下して持物を執る勢い。右手は顔前に挙げて持物を執る勢い（顔は斜め右に向けて右手の持物を見る）。左足を斜め前方に踏み出して磐座上に立つ。	左足柄：辰台座天板裏：たつ神台座裏側面：享	仏では左手に弓、右手に矢を持つ。
6	巳神	49.4 cm	木造古色玉眼	炎髪、頭頂に標示の蛇頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。目尻を吊り上げ割目する憤怒相、閉口。革鎧を着用、右足を斜め前方に踏み出して顔や身体も斜め右側に向く。左手は振り上げて宝珠を執る。右手は斜め下に出して拳とする。磐座上に立つ。光背亡失。	右足柄：へ台座天板裏：み神	仏では左手で鉞を持つ。

7	午神	49.8 cm	木造 古色 玉眼	炎髪、頭頂に標示の馬頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口。耳朵不貫。革鎧を着用するが大きく前面をはだけて、胸・腹を露出する。左手は腰に置く、右手は振り上げて持物（銚）を執る。右足を踏み上げて磐座上に立つ。	右足柄:七 左足柄:一 十	仏では 左手に 螺貝を 持ち右 手に銚 を執る
8	未神	48.9 cm	木造 古色 玉眼	炎髪、頭頂に標示の羊頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉を顰め。視き込むように目を細め、口を歪める。耳朵不貫。革鎧を着用する。左足を左斜め前方に踏み出して頭体を左斜め前方に向ける。左手は腰高に出し、右手は胸高に出して両手で持物を持つ勢いとする。磐座上に立つ。	無し	仏では 両手で 矢を持 つ
9	申神	47.2 cm	木造 古色 玉眼	甲を着用、頂上に標示の猿頭を現わす。金銅製の前飾りを甲前飾を付ける。眉を逆八字に吊り上げ割目する憤怒相、閉口。革鎧を着用する。左手は肩高に挙げて宝珠を執る、右手は胸高で第二・三指を立てる刀印とする。右足を斜め前に踏み出して磐座上に立つ。	台座天板 裏:さる神	仏では 左手で 宝珠を 持つ
10	酉神	50.0 cm	木造 古色 玉眼	炎髪、頭頂に標示の鶏頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。目尻を吊り上げ割目する憤怒相、閉口。耳朵不貫。革鎧を着用する。右足を右斜め前方に踏み上げ頭体は逆に左斜めに捻る。左手は左斜め下に突き出し、右手は振り上げて独鈷杵を執る。磐座上に立つ。	左足柄:酉 台座天板 裏:鳥神 台座裏面: 酉	仏では 右手で 獨杵を 持つ
11	戌神	48.6 cm	木造 古色 玉眼	炎髪、頭頂に標示の犬頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。目尻を吊り上げ割目する憤怒相、閉口。耳朵不貫。革鎧を着用する。左手は垂下して拳とする、右手は腹高で宝剣を執る。左足を左斜め前方に出して磐座上に立つ。	台座天板 裏:いぬ (鉛筆書)	仏では 右手で 剣を持 つ。
12	亥神	48.3 cm	木造 古色 玉眼	炎髪、頭頂に標示の猪頭を戴く。金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。眉を逆八字に吊り上げて割目する憤怒相、閉口。耳朵不貫。革鎧を着用する。左手は腰に置き、右手は振り上げて太刀を執る。右足を踏み上げて磐座上に立つ。	左足柄:三 右足柄:亥 台座天板 裏:い神 台座裏:享	仏では 右手に 太刀を 持つ
13	俗体坐像	22.0 cm	木造 古色 彫眼	頭に巾子冠を被り面相は温顔、顎髭を蓄える。耳朵不貫。袍と表袴を着け、両手は腹前で甲を外に向けて合わせ持物（笏カ）を執っていたものと思われる。背中に五段の突起を現わす。両蹠を接して坐る。	無し	像容から 天神 像の可 能性が 高い。

No	像名	像高	材質	像容	銘	考察
14	日光菩薩	48.4 cm	木造 彩色 玉眼	宝髻を結う、金銅製透かし彫りの宝冠と冠帯を着用。白毫相を現わす。面部寂靜相。耳朶不貫。三道相を現わす。胸飾を着用。上半身には条帛と天衣を着用。左手は肩高に挙げ、右手は腰高に下げて柄のついた日輪を執る。下半身には腰裳を着用、腰裳の上端は二段に折り返す。右足を遊び足として腰をやや左に捻って立つ。台座は蓮華座、光背は円光背。	無し	本尊薬師如来像の脇侍。現本尊より当像の方が大きいので、現本尊が後補であることが確実である。定式化した像容で、彫法も手慣れている江戸期の制作と思われる。
15	月光菩薩	49.1 cm	木造 彩色 玉眼	大略日光菩薩に同じ、但し左右相似形となる。	無し	

写真：俗体坐像・日光菩薩・月光菩薩



写真：調査中の濱名徳順師

薬師堂内十二神将などの調査

本堂内阿弥陀像調査

